

# みどりひと



みどりの新聞 平成19年7月20日 発行 No.140

専門家に聞く

## 園芸ワンポイント

指導  
森 正  
先生

みどりに関する専門相談は  
塚山公園みどりの相談所  
TEL 03-3302-9387 (毎週土・日曜日)



### バラの夏の手入れ

秋バラ(10月中旬頃)をより大きく美しく咲かせるためには夏の手入れが大切です。

#### ① 剪定

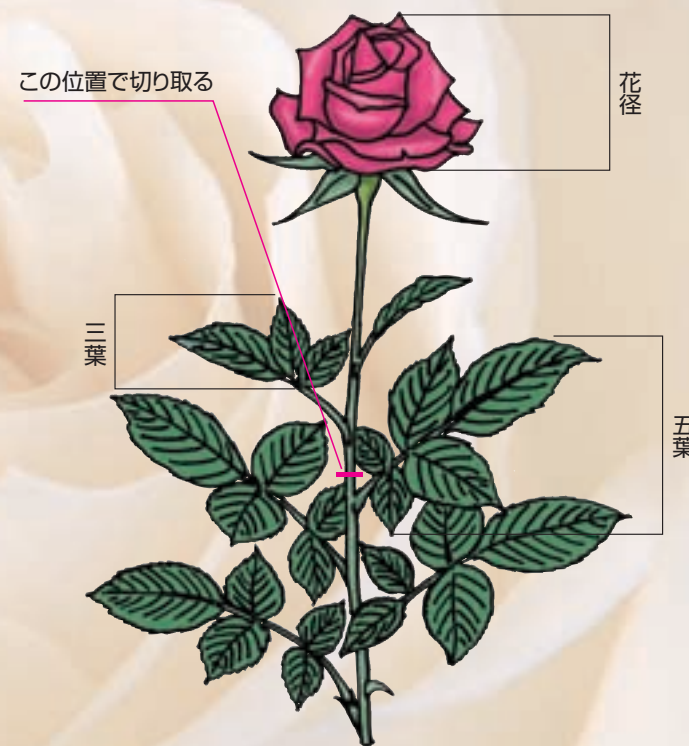
春以降に伸びた枝を下から外芽2つを残して切ります。また、不要な枝や枯れ枝、弱々しい枝なども切ります。(8月25日を過ぎたら、10月の花をつけさせるために五葉の上(右図)で切る)

#### ② 施肥

太くしっかりした新しい枝を出させるには肥料が必要です。油かす、牛ふんなどの有機質肥料を根の周囲数箇所を浅く掘って埋込みます。

#### ③ 薬剤散布

もし病気や害虫の被害が予想される場合、病気では殺菌剤を、害虫では発生を確認してから殺虫剤を散布します。特に黒星病と、うどん粉病に注意しましょう。



### 連載

#### みどり再発見

#### 大宮八幡のみどり



「東京のへそ」、大東京の重心と言われている大宮八幡宮。源頼義が康平六年(一〇五三)に京都石清水八幡宮より分霊を鎮座したと伝えられています。当時は多摩の大宮と称せられ、埼玉県の氷川神社・秩父神社とともに、武蔵国の三大宮の一つでした。

境内はみどりに溢れています。大鳥居から入ると表参道の両側には、およそ一千本のつつじがあり、毎年五月につつじまつり(春の大祭)が行われます。樹木めぐりを続けましょう。神門をくぐると左右に夫婦銀杏(区貴重木)がひとときを偉大に聳え、さらに神殿に向かって左手の菩提樹(区貴重木)は、徳川家康の次男・松平秀康の夫人・清涼院お手植えのもので、都の天然記念物となっています。時計回りに歩くと奥に、榎の木に犬桜が着生したご神木「共生の木」が見られます。神殿の北東側には、昭和初期の元首相などの植樹による楠の大木があり、近くには、葉の裏に文字が書けるといいう多羅葉(はがきの木)が生え、水盤には古代蓮の大賀ハスが分栽され、その東側には神宮外苑で有名になったひとつばたご(なんじゃもんじゃの木)が大小二本、葉を繁らせています。善福寺川寄りの樹林帯には、珍しく曲がった幹で棘のある針桐(柎の木)があり、特売品の桐下駄はこれで作られたとか。他にも、沢をふさぐほどよく繁り藍色の実がきれいな沢蓋木、昔丸木弓を作ったといわれる櫓、秋に紫色の実を

つける紫式部、大きな椋木などが見られます。およそ五万平方メートルの境内で、これだけの樹木を維持管理するのに一番苦労されることは清掃とこのことでした。境内用の竹箒も、通常の丸く束ねたものでなく、横に広い熊手形をした竹箒で、砂利敷の境内を掃かれています。



▲深いみどりにつまれた表参道



▲区の貴重木・都の天然記念物の菩提樹



### みどりの実態調査が始まります

みどりの計画係(内線3594)

今年は「みどりの実態調査」の実施年です。区では5年ごとに、航空写真撮影や現地調査から、みどりの量や分布などを把握しています。現地調査に際し調査員がお伺いした際にはご協力をお願いいたします。

### 編集後記 「みどりひと」はみどりのボランティア杉並と協働で編集しています。

- 編集会議に向かう道すがらクチナシの香りを楽しみました。次回はどんな花の香りがするでしょう。(山)
- 変則的な「みどり探訪」記事になってしまいましたが、探訪記事にも、通う血の暖かさがなければいけなかったのかと、一学習しました。(松)
- 取材中でさえも、世の中予期せぬことが突然起こるものです。備えあれば憂いなしの心掛けが、肝要と感じました。(中)
- 今年から編集グループに加えさせていただきました。杉並の緑を守り育てるために、少しでもお役に立てれば幸いです。(羽)

みどりの新聞 みどりひと140号 平成19年7月20日発行

編集/みどりのボランティア杉並  
編集・発行/杉並区都市整備部みどり公園課 〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 ☎03-3312-2111  
「みどりひと」は区ホームページでもご覧いただけます。 <http://www.city.suginami.tokyo.jp/>





# 緑の歳時記

## ヒロハノレンリソウ (広葉の連理草) マメ科

今回より杉並区内でよく見かける帰化植物※について紹介いたします。

ヨーロッパ原産のつる性多年草。明治初期(1870年頃)観賞用として渡来し、現在「宿根スイートピー」の名で市販されており、栽培の拡大に伴い、近年、野生化しています。

莖は扁平で両縁が翼となり、よく枝分かれして高さ60~300cmになり、葉軸が伸びて巻きひげを出し他物に巻きついて莖を支えます。葉も翼のある柄を持ち、1対2枚の小葉をつけます。花は夏に咲き、紫紅色、白色があります。スイートピーの近縁ですが香りはありません。ヒロハノレンリソウに花言葉はありませんが、ちなみにスイートピーの花言葉は「ほのかな喜び」です。なお、区内では井草森公園(井草4-12-1)で見ることができます。



※ 帰化植物：人力によって意識的にせよ、無意識的にせよ、ひとつの植物が本来の生育地からそのものが自生していない新しい地域にもたらされ、野生化して繁殖し、その植物の歴史を知らなければその土地本来の自生種と一見区別のつかないようになっている状態をいいます(小倉謙著「植物の辞典」より)。また、一般的には明治維新(1868年)前後からのものをいいます。

# みどり探訪

杉並のみどりとそれに関わる方々をご紹介します。

## みんなで緑を守り育てる—中瀬幼稚園



中瀬幼稚園(杉並区下井草)は豊かな緑にあふれています。大きなケヤキ、カシ、タケ等の森の懷に、抱かれるようにひろがる木々の配置、遊具など、その園庭づくりは、子どものスケールにピッタリと合っているの、遊んでいる子ども達は藤城清治の切り絵の中にみる妖精のように、キラキラと輝いて見えました。

園の周囲の都会の大きな森、この先祖から受け継がれた緑を育て護っているのは、井口園長や先生達、園児、保護者、プロの職人さんと大勢の人々です。井口園長は、ご自分でこのことを伝えたいと、記事を書いてくださいました。探訪記事では伝えきれない、みどりと幼児教育にける実践者の、本当の暖かさがお伝えできて良かったと思っています。

### みどりと人そして幼児教育

中瀬幼稚園長 井口佳子

土の下を這う、しっかりとした木の根を見つけた子ども。私も手伝って、次第に細くなっていく根を掘り出していく。「アッ、もしかしたら！」アオギリの方から伸びてきているその根は、少し先の水の流れに向かっていた。

「あっ、この根っこ、皆がいつもお世話になっているアオギリの根っこかもしれない。喉が乾いてここへお水を飲みに来たのかも知れないね。埋めといた方が良くと思うよ」。納得した子と、今まで掘り出していた根を今度は埋めにかかる。しばらくして、ここに年長児の作った看板を見つけた。『掘らないでね』このアオギリは、第一回目の卒園記念樹である。

屋敷林を背に、庭や畑であった所に父が幼稚園を作って40数年になる。ケヤキやカシに抱かれた園庭にも、センダン、ムクロジ、リンゴ、クルミ、グミ、ヤマボウシ、フジザクラなどの樹木を植えた。種から育ったミモザアカシアも、園庭の真ん中で、春先には黄色い花をつけてくれるようになった。

わが家では、「木は切るな」と折に触れて語り継がれてきた。私は子供の頃から、木々を見上げその命の存在をなんとなく感じてきた。だから余程のことでもない限り木を切ることはなかった。今は「竹の子村」となっている所に、昭和のはじめの区画整理の前の、旧道のケヤキ並木の一部がそのままに残されている。

この屋敷林から園庭にかけての「小さな地球」の中で、幼稚園の保育は営まれている。そして、この手入れには結構気を使っている。

ケヤキやカシ等の高い木の手入れは、祖父の代から長いお付き合いの林業の方をお願いしている。皇居の森の手入れもしている方である。そして、中間の樹木は園芸の方に。地面が一番近い所は、お母さん達が手伝って下さっている。卒園した方も時々きて下さる。苗植え、株分け、水やり……仕事は沢山ある。草はある種類以外は抜かずに切るののであるが、植物のことについて知るよい機会となっている。子ども達の仕事もある。

2年程前、地面の下の工事をしてから、土の状態が少し良くなったのか、様々な草が仲良く共存し、虫達のためにも良い草むらが出来、アチコチにできるようになった。勿論、日々ここに関わる人達の努力にもよる。抜いたり切ったりした草や摘んだ花がら、役目を終えた保育室の花遣や落葉も何力所かに積み、しばらくするといい土になる。そしてそこにまた草が生えてくる。

手入れのため切られた枝は、お母さん達が炊いて布を染める。美しい色が現れる時、植物の精の存在を感じる。太い幹は、子ども達の遊び相手や

虫の棲みか。やがて土に還っていく。

卒園の記念に、子供達も加わって、枯葉の山の土をふるって土作り。植物にとって大切なのは、いい土である。幼児教育も、美しい花が咲く為の「土作り」と思っている。

ここで行われていることは、どれも特別なことではない。誰でも出来ることばかり。植物や土と仲良くなった子供達やお母さんは、元気になっていくように思う。自然から学ぶこと、そして受ける恵みは大きい。



### 屋敷林の公共性

井口園長の知人:廣瀬俊介(東北芸術工科大学 建築・環境デザイン学科准教授)

武蔵野の屋敷林は、江戸時代の開墾に際して強風から家屋や畑地を守るためにつくられたと伝えられます。これら屋敷林は、市街化が進んだ中で土地の歴史を伝えているだけでなく、現代の私たちの「生」を支えてもいます。

木々の枝葉は、太陽から届く光と熱を受けとめます。また、木や草は根から水を吸い上げて、葉で蒸散をします。水は、気化するとき周囲の熱を奪います。屋敷林の中や近くでは、植物による直射日光の遮断と水分蒸散、加えて地面からの水の蒸発などもあって気温上昇が抑えられます。この他にも空気清浄化、吸音、延焼防止、地下水涵養と洪水調節、生物の棲みかとなること、私たちの心を動かす場となること等々、樹林は人間からみて数々の意義や機能を有しているといえます。屋敷林には、このように多大な公共性、公益性が認められます。

杉並区の緑地のおよそ7割を、私有地が占めていると言います。明治時代、公園は都市の「肺」とも位置づけられて、その整備が法制化されました。今、公有地がまず果たすべき役割を屋敷林のような私有地が肩代わりしているならば、固定資産税や大樹の手入れなどにかかる土地所有者の負担を無くせないものではないでしょうか。例えば、森林や水田を支える治山と治水、生産、環境保全などの公益を評価した上で、その維持管理に対する所得保障や交付金制度を実施する飛騨市のような自治体が、わが国にはあります。

# みどりのイベント2007

5月26日に区立柏の宮公園にて



5月26日(土)午前10時から午後4時まで、区立柏の宮公園にてみどりのイベント2007が開催されました。みどりのボランティア杉並や区内造園業者有志、みどり公園課によって、

みどりのボランティアに関する活動の紹介、自然素材を使った工作、剪定講習会、飲食物の販売、点茶会等が行われ、約400人の親子連れなどで賑わいました。また、この日、出展ブースに“みどりの基金”の募金活動をお願いし、来場された方々から18,141円のご寄附をいただきました。ありがとうございました。

